

ザビエル来日450年をめぐる 「諸行事とマスコミ報道」の検証

外 村 民 彦

序

フランシスコ・ザビエルがキリスト教伝道のために日本にやって来たのは、1549年8月15日のことであった。1999年はその満450年にあたる年であったため、これを記念して日本国内の関係都市では、さまざまな行事が催された。また、キリスト教国でもない日本だが、新聞、テレビはたびたび報道をした。ザビエルが日本にはじめてキリスト教を伝えた人物だったこと、ザビエルの来日が日本とヨーロッパの最初の文化接触であったことなどが、マスコミの関心を集めたのだと思う。

たしかにザビエルの時代は、大航海時代の始まりの時期であり、後世に大きい影響を与えた植民地時代の開幕を告げる時期であり、キリスト教が世界に広がってゆく時期であった。そうした時代の流れの中で、ザビエルがなぜ日本に来たか、日本で何をみたか、どう宣教し、それはどう成功、あるいは挫折したかなどは、重要なテーマである。

さらに大事なことは、ザビエルたちと当時の日本人たちがどんな形で文化接触したか、つまり、仏教の僧侶たちとキリスト教宣教師たちがどんな対話をしたかという、その内容なのだが、それが新聞紙面、テレビ画面にどれだけ登場するか、私の関心の対象であった。

とくに「ザビエル後」において、日本政府によってキリシタン禁令が行われ、世界に例を見ないような迫害、殉教という悲劇をもたらした事実を考えると、最初の東西文化接触は決して、美しい、甘いものではなかったことがわかるのだが、報道ではそうした本質に迫っていたのだろうか。

世界の宗教の潮流は、1960年代のベトナム戦争のころ開かれたローマ・カトリックの第二バチカン公会議によって「教会一致運動」(エキュメニズム)が展開され、キリスト教世界だけでなく、諸宗教の対話が盛んになってきている。ザビエル時代のような「排他」はもはや消えているわけだが、それだけに、ザビエル時代の「仏教・キリスト教の対話」の検証は、当然なされなければならなかったと思う。

しかも、長い植民地時代の名残は、20世紀末期にもなお存在し、ポルトガル領のマカオが1999年12月20日にやっと中国に返還された。かつてザビエルが周辺を宣教して回ったインドネシアの東ティモールでは1999年8月、

住民投票によって独立を決定した。現代と450年前とが決して無縁ではないことをわからせてくれるものを、報道に望むところであった。はたしてどうであっただろうか。

本稿では、ザビエル来日450年をめぐる多くの行事の内容、およびマスコミ報道の状況を取り上げてみたいと思う。

§ 1 「450周年記念」の諸行事

最初に、450周年を記念する各地の行事を見てみたい。

(1) 「大ザビエル展—その生涯と南蛮文化の遺宝」

まず何よりも挙げられるのは、全国六都市で開かれた「大ザビエル展」である。これはキリスト教信者のための展覧会というのではなく、ひろく一般市民のための企画であった。六都市のトップを切って開催した川崎市市民ミュージアムの望月一樹学芸員は、筆者(外村)の取材に答えて、なぜ巡回展のトップだったかについて「開館10周年記念展としてこのザビエル展を早くから企画し、平成10年度事業として開催するためだったから」と言う。「私はキリスト教とは関係ないのだが、専門が歴史で、ザビエルには興味があった」そうである。(注1)

【開催地と日程】次の通り。

- 1月15日—3月14日＝川崎市市民ミュージアム(神奈川)
- 4月6日—5月30日＝山口県立美術館(山口)
- 6月10日—7月20日＝東武美術館(東京)
- 7月31日—8月29日＝鹿児島県歴史資料センター黎明館(鹿児島)
- 9月11日—10月24日＝岡崎市美術博物館(愛知)
- 11月12日—12月5日＝長崎県立美術博物館(長崎)

【出品物】229点に及んでいる。展覧会の3構成の流れの中で見ると――

- ①ヨーロッパとの出会い＝オルテリウスの日本図、南蛮人來朝之図ほか、カラフルな屏風類や地図など。
- ②ザビエルとキリスト教の伝来＝ザビエルを主題にした絵画や彫刻などの美術品、聖遺物、文書類、キリシタン関連の歴史資料など。「海水を水に変える聖フランシスコ・ザビエル」、聖遺物の「長靴の部分」「ドン・ジョアン三世あて自筆書簡」などのほか、日本での「踏み絵」。
- ③海を渡る交流(南蛮文化と日本文化)＝日本でのキリ

スト教美術、南蛮漆器、洋風画など。

これらの229点の出品物は、日本各地の大学や図書館、美術館、博物館、仏教寺院、官庁などの所蔵品であり、また、ポルトガル、スペイン、バチカン、ドイツ、インドの美術館、博物館から出品されたものであった。

この中で、重要文化財は以下の通り。(注2)

四都図・世界図屏風(神戸市立博物館所蔵)、レパント戦闘図・世界地図屏風(神戸・香雪美術館)、日本図・世界図屏風(福井・浄得寺)、天正遣欧使節記(東京国立博物館)、板踏絵・無原罪の聖母(東京国立博物館)、板踏絵・エッケ・ホモ(同)、板踏絵・ピエタ(同)、板踏絵・ロザリオの聖母(同)、真鍮踏絵・エッケ・ホモ(同)、真鍮踏絵・ピエタ(同)、真鍮踏絵・ロザリオの聖母(同)、真鍮踏絵・十字架上のキリスト(同)、聖体秘蹟図指物・天草四郎時貞陣中旗(熊本県本渡市立天草切支丹館)、聖母子像・雪のサンタマリア(東京国立博物館)、聖母子像(同)、聖母像・親指の聖母(同)、三聖人像・聖ドメニコ、聖ロレンソ、聖カタリナ(同)、三聖人像・模写(同)、聖人像(同)、泰西王侯騎馬図屏風(神戸市立博物館)、泰西王侯図屏風(長崎県立美術館)、洋人奏楽図屏風(東京・永青文庫)、泰西風俗図屏風(福岡市美術館)、葡萄蒔絵螺鈿聖餅箱(鎌倉・東慶寺)

また、重要美術品は次の通り。(注3)

南蛮人來朝之図(長崎県立美術館)、南蛮屏風(堺市博物館)、南蛮屏風(千葉県佐倉・国立歴史民俗博物館)、聖フランシスコ・ザビエル像(神戸市立博物館)、大友宗麟公画像(京都・瑞峯院)

(注1) 初出、外村民彦筆、「聖母の騎士」誌1999年3月号

(注2、3) いずれも「来日450年大ザビエル展図録」記載の出品リストによる

(2) 8月15日の鹿児島(注1)

次に、具体的な行事の現場を訪ねた状況を説明したい。

8月15日は、ザビエルが日本の鹿児島に到着した日である。450年後の1999年のこの日、筆者は鹿児島を訪れて、ザビエルにまつわる行事などを見て回った。すでに開催中の行事としては、7月31日からの鹿児島県歴史資料センター黎明館での「大ザビエル展」、隣の鹿児島県立図書館での「スペイン・ポルトガル図書フェア」があり、午後1時から上陸地点でのカトリック教会主催のミサ、午後7時から鹿児島県文化センターでの創作オペラ「天正遣欧少年使節・忘れられた少年—ザビエルが遺したもの」上演などが予定されていた。

○午前9時、市内のホテルを出てタクシーに乗り、まず池之上町にある福昌寺に向かった。ここは、ザビエルがよく訪問した曹洞宗の寺で、東堂(前住職の意)忍室との宗教論議をした場所として有名なので、その跡はどうなっているのか、確認しようと思ったわけである。現場は鹿児島玉竜高校の近くで、もちろん寺は跡形もなく、

島津家代々の墓が並んでいた。人影は見られない。忍室の墓も近くにある。

寺跡そばの小道に「キリシタン墓」の矢印を見つけたので、標識をたよりに裏山へ上がった。急な狭い石段を百数十段あがると、木々に覆われた暗い空間に、「キリシタン墓」と刻まれた墓石があった。真新しい花が生けられていた。だれが捧げたのだろうか。8月15日だからなのか、それとも、絶えることなく供えられているのだろうか。

傍らの案内板によると、明治3年(1870年)、長崎・浦上のキリシタンが各地に分散留置されたとき、鹿児島に来たのは375人。そのうち53人が、明治6年に帰郷できなくなった時までに死去した。散在していた彼らの墓を、明治38年にラゲ神父がここに集めたという。

○市街へ戻って、東千石町のザビエル公園に行く。繁華街に近いのだが、350平方メートルほどの敷地は静寂だ。「フランシスコ・ザビエル聖師滞鹿記念碑」が大きく建っており、そばにザビエルの胸像。また、バス道路を挟んで公園の向かい側には、今年を記念して建て替えられた「ザビエル教会」(後述・注2)が、完成したばかりであった。

○午後1時、ザビエル上陸地点と言われる祇園之洲町で記念ミサが始まる。「ザビエル上陸祈念碑」があるところで、この碑には「たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったらなんの益があるのか 聖書」と刻まれている。前方に大きい桜島を望む広場には、600人ほどの信徒たちが集まっていた。ミサの中では、ザビエルの書簡から「この国の人びとは今までに発見された国民のなかで最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒の間ではみつからないでしょう」という一節(注3)が読み上げられ、また、ザビエル賛歌「ひがしのうみに」が歌われた。

○つづいて筆者は、これまで日本の各地を回ってきた「大ザビエル展—その生涯と南蛮文化の遺宝」が開かれている鶴丸城跡の黎明館に入った。すでに川崎市での会場でも見ているのだが、ここ鹿児島でも市民が続々と訪れ、熱心に黙々と見入っていた。高齢の夫婦、若いカップル、小学生と親、中学生グループらさまざま、関心の幅の広さをうかがわせた。ザビエルはじめ宣教師たちによってもたらされたヨーロッパ文化、当時の日欧の世界観、日本との交流の事情、ザビエルの遺品などが理解できる展示であり、中でも「南蛮屏風」は華やかで、若い人の注目の的だった。さらに、会場の片隅にビデオ「ザビエルの道」の上映コーナーがあって、いつも十数人が見ていたのも印象的であった。

隣の建物の県立図書館1階で開かれている「スペイン・ポルトガル図書フェア」には、ポルトガル、スペインの原書を中心に内外の図書300冊が並ぶ。

○午後7時、県文化センターのホールで、創作オペラ「忘れられた少年—ザビエルが遺したもの」が上演された。

これは東京オペラ協会の石多エドワード氏の作品で、石多氏自ら陣頭指揮をとり、また出演もしている。午前中にこの作者に会って話を聞いたのだが、それは次のような内容であった。――

「世界が平和であるためには、国際交流をしっかりとしていくしかないし、お互いの文化を認めあっていかなければならないと思う。オペラはいろいろな国の人と思ひ合えるものです。それもヨーロッパそのままのオペラでは意味がなく、日本人として作ったオペラを広く紹介して、日本を分かってもらいたいと願っています。その意味で、ザビエルや天正遣欧少年使節は、国際交流にふさわしい題材だと思ってつくりました」

「……国と国、民族と民族、人と人、違っているからと、すぐ憎み合うのではなく、違うところを分かり合えば、憎しみは柔らぐと思う。いま相手のことを考える余裕はなく、相手の憎い材料を探して憎みあっているように思いますが、戦争の危機に直面しているとき、相手を見つめ合う態度が必要です。今度のオペラには、そうした思いをこめました」

51歳の石多氏の母親は、スペイン系フィリピン人で、そんな境遇が「自分とは何か」「人間とは何か」を考えさせてきたと言う。クラシック好きが高じて武蔵野音大の音楽科に学び、東京オペラ協会の中心的存在として活動している。

オペラ「忘れられた少年」の出演者や合唱団員は、3歳の幼児から大人まで、ほとんどが市民たち。プロテスタントの牧師も参加している。第1幕の主人公である遣欧四少年を演ずるのは鹿児島市内の女子中高生であり、30数人の合唱団員は、ザビエル上陸450周年のためにできた「記念合唱団」である。オーケストラの40人も、地元の学生や社会人で構成されている。

第1幕は四少年がローマで歓待され、希望をもって帰路につくまで。第2幕は10年後のキリシタン禁教下、四少年のその後の苦悩を描く。第1幕のザビエルと忍室との対話や、第2幕の中浦ジュリアンと、棄教した千々石ミゲルとの対話は、やま場である。日本人の共通の思いが集約されているやりとりであり、遠藤周作が「沈黙」で訴えたものと重なってくる。

「これから日本だけでなく、ヨーロッパでも上演していく」と石多エドワード氏は意気込んでいた。

(注1) 初出、外村民彦筆・「聖母の騎士」1999年10月号 p 2 - p 5

(注2) 次ページ(4)

(注3) 「聖フランシスコ・ザビエル全書簡」河野純徳訳・平凡社 p 471、書簡第90-12 (1549年11月5日、鹿児島よりゴアのイエズス会員あて)

(3) 鹿児島県で行われた諸行事

鹿児島はザビエルが上陸し、最初の宣教地だったから、450周年の記念行事は「目白押し」であった。「観光かごしま大キャンペーン推進協議会」のパフレットによる

と、主な行事内容は次の通りである＝上記(2)の記述と一部重複。いかに観光客をひきつけるかに腐心しているかを示す企画となっている。

- ・ 7月24日―25日＝種子島鉄砲まつり(西之表市) ザビエル上陸450周年記念展、ミニ・ポルトガル村開設、火縄銃試射
- ・ 7月31日―8月29日＝大ザビエル展―その生涯と南蛮文化の遺宝(黎明館)
- ・ 7月31日―8月29日＝スペイン・ポルトガル図書フェア(県立図書館)
- ・ 8月8日、21日＝ザビエル上陸記念講演「ザビエルと鹿児島」など(黎明館)
- ・ 8月12日＝オペラ公演「ザビエルと出会った薩摩人―忘れられた少年パートⅡ」(伊集院町文化会館)
- ・ 8月15日＝オペラ公演「忘れられた少年―ザビエルが遺したもの」(県文化センター)
- ・ 8月22日＝ザビエル上陸記念映画会「ザビエルの歩いた道」(黎明館)
- ・ 9月29日―10月11日＝ザビエルウィーク(伊集院町) モニュメント建立、ザビエルフェスティバル開催、スペインとの交流促進
- ・ 10月5日―12日＝ザビエル大写真展(山形屋文化ホール)
- ・ 10月8日＝ザビエル像除幕式(ザビエル公園) ザビエルと薩摩人(アンジロウとベルナルド)の銅像除幕
- ・ 10月9日―12日＝かごしま・スペイン・ポルトガル観光物産展(鹿児島港本港区中央緑地広場)
- ・ 10月9日＝ザビエル上陸450周年記念国際シンポジウム(鹿児島・城山観光ホテル)
- ・ 10月9日―12日＝ザビエル聖腕崇敬(鹿児島・新カテドラル)

聖腕というのはザビエルの右腕のこと。日本での2年余りの宣教を終えたザビエルは中国の上川(サンシャン)島で死去、遺体を早く腐敗させて持ち帰るため、ひつぎに石灰を入れて埋葬した。それにもかかわらず2ヶ月後にも、生きていたときと同じ姿だったと言われる。腐敗を免れた遺体はそれ以来今日にいたるまでインド・ゴアのボム・ジェズ教会に、右腕はローマのジェズ教会に安置されて、信徒の崇敬の対象となっている。日本には1949年、ザビエルの来日400年祭のときにもたらされており、今回は2度目のお目見え。10月8日にローマから到着、その日のうちに鹿児島カテドラルに運ばれ、9日と10日は一般公開された。(注1)

- ・ 10月10日＝ザビエル像除幕記念式典(鹿児島市民文化ホール)
- ・ 10月11日＝ザビエル渡来450周年記念荘厳ミサ(鹿児島アリーナ)

この記念ミサには、ローマ教皇の特使としてエドモンド・ショーカ枢機卿(バチカン市国行政庁長官)が

派遣され、駐日教皇庁大使エムブローズ・デ・パオリ大司教、教皇庁教育省局長ジュゼッペ・ピタウ大司教も参加して国内外21人の司教が列席。これに150人の司祭、海外も含めた巡礼者、プロテスタント、仏教関係者、一般市民ら約6000人が集まった。午後2時、司祭団の入場につづいて、司教団とともにザビエルの右腕が入堂した中で、ヨハネ・パウロ2世の「特使任命書」が読み上げられ、シヨーカ枢機卿の司式でミサは行われた。(注2)

- ・12月3日＝ザビエルの大航海ヨット入港(鹿児島港)
5月ポルトガル・リスボン出港
(注1、注2) いずれも、カトリック新聞99年10月17日付

(4) 鹿児島島のザビエル聖堂再建

ザビエル来日450周年を記念して、鹿児島市照国町にあるザビエル教会が再建された。正式名称は「鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂」で、渡来400周年を記念して1949年に建設された旧教会は98年春に解体されて、建て替え工事がつづけられていた。ザビエル来航時の交易船をイメージし、約31メートルの鐘楼がそびえ、建物正面が赤色に浮かび上がる新しい教会は、99年9月15日に献堂式(落成式)が行われた。(注1)

この新聖堂の正面には旧聖堂の土台石が敷かれて「ザビエルロード」としており、旧祭壇を新カテドラルの祭壇として再生され、また、臨終のザビエルと上陸したザビエルの絵画(長谷川路可作)が記念室に保管されている。(注2)

- (注1) 朝日新聞(西部版)99年9月15日付
(注2) カトリック新聞99年10月10日付

(5) 国際シンポジウム

鹿児島で国際シンポジウムが開かれたほかに、東京・上智大学では「フランシスコ・ザビエル渡来450周年記念《国際シンポジウム'99》(高祖敏明実行委員長)が12月4日、5日、開催された。これは日本カトリック司教団の要請を受けて企画・準備が進められ、98年12月に「ザビエル年」の開幕となった国際シンポジウム'98「大航海時代におけるヨーロッパとアジア世界との出会い」を受けたものであった。ことしのテーマは「アジア世界におけるヨーロッパ・キリスト教文化の展開―受容・拒絶・触発」で、延べ1200人が参加して、内外の講師による基調講演、対談、討論を聞いたという。

第1日のテーマは「キリシタン文化とその歴史的意義―ザビエルのまいた種は結実したか」。『高山右近』の著者である作家加賀乙彦氏が「高山右近と日本文化」と題して基調講演し、禁教令に敢然と立ち向かって命をささげた戦国武将と、第2次世界大戦で近隣諸国への侵略政策に追従した日本の教会とを対比させて、小説『高山右近』が出来あがっていく過程を披露した。その日のシンポジウムは「キリシタン文化の心と形象―ザビエルの何

を継承し、何を克服したか」をテーマに、4氏が発表をした。

第2日は「文化と宣教―ザビエルを超えて二十一世紀へ」というテーマで、元上智大学学長で現在ローマ教皇庁の教育局長・ジュゼッペ・ピタウ大司教が「キリスト教宣教の現実と未来」という題で基調講演した。そこでは、キリスト教がその独善性、排他性において、他宗教とのかかわりなどで犯した歴史上の過ちと、アジアにおけるキリスト教の位置づけについて述べ、「ザビエルの時代を皮切りにキリスト教はアジアの民衆レベルでは驚異的な広がりを見せたが、それがつづかなかったのは、原因は民衆の拒否ではなく、為政者たちの迫害と阻止にある」とした。

また、「キリスト教宣教とアジア文化―アジア的キリスト教の実態と可能性」というテーマのシンポジウムで、韓国、タイ、インドネシア、フィリピンの事情について、内外の講師が意見発表をした。(注1)

なお、前年のシンポジウムは98年12月3日、5日、6日、上智大学で開かれ、ドーリル・オールデン・ワシントン大学教授が「西洋のアジア世界との出会い」について、結城了悟・日本二十六聖人記念館館長が「ザビエルの宣教師魂」について基調講演をした。2日目は「アジア各国はザビエルに何を見たか」を主題として4氏が発題、3日目最終日は「ヨーロッパ美術の拡張と異文化の受容」と題するシンポジウムで3氏が意見を述べ、ヨーロッパのアジア進出が日本の文化に何をもたらしたかが、浮き彫りにされた。(注2)

こうしたシンポジウムを通して、ザビエルの日本への影響の大きさを知ることができると思うし、「450周年」の意義も理解できよう。

- (注1) カトリック新聞99年12月12日付
(注2) キリスト新聞98年12月25日付

§ 2 マスコミ紙誌の報道から

(1) NTT広報誌 Communication に見る企画

NTTの広報誌「Communication」の1988年3月号に「外国人列伝①」として、ザビエルを取り上げている。タイトルは「日本に異文化を運んできた フランシスコ・ザビエル」で、筆者は松田毅一・京都外国語大学教授。450年周年にはまだ10年余があるわけだが、すでに450年を視野に入れた企画といってもよく、ザビエルの歴史的意味を述べている。その中見出しだけを拾って記すと、「ヨーロッパ・キリスト教文化を持ちきたり、仏教とのかけ橋たらんことをめざす」「イエズス会司祭ザビエル、布教の旅へ船出す。マラッカの地で弥次郎と出逢う」「鹿児島から平戸、さらに京、山口へ。時節柄悪しとひとまず辞去」「日本人を高く評価、ヨーロッパに日本征服の否を説き、彼の地で死去」となっており、ザビエルの行動の概略がわかる内容である。

(2) キリスト新聞「ザビエル来日四五〇年記念企画—日本キリスト教史の旅・第1部—ヤジロウから万次郎まで」

このキリスト新聞(週刊)の企画は、1998年11月7日付から99年8月14日まで9ヶ月にわたったもので、「予告」を含めて38回に及ぶ、力が入った連載であった。「(ザビエルらによる)キリスト教という普遍的価値に接した日本人が、どのようにその価値を、外来思想としての仏教や、古層としてのアニミズムやシャーマニズム・神道(天皇制思想)を背景にもちながら受容しようとしたのかを、明らかにしたい」(「予告」より)というのが、この企画の目的である。

まずこのシリーズの最初の部分では、ザビエルを日本に連れてきたアンジロウと、ザビエルから洗礼を受けた盲目の琵琶法師ロレンソの、二人の日本人を描きつつ、ザビエルの日本における宣教状況を展開している。それが単に暦年式に記述しているのではなく、その流れの中で、芥川龍之介、遠藤周作らの作品に見られるキリシタンの実態、日本人の精神のありようを織り交ぜていて、現代の問題としてザビエルの意義を取りこもうとしている意図がうかがえる。これは全編を通じて感じ取られることであり、千利休の高弟・七人のサムライ(第11回—16回)では高山右近を追い、さらに細川ガラシア、おたあジュリア、天草四郎ら、「ザビエル後」のキリシタン時代に信仰を守って殉じた生きざまを活写していることが目を引く。

一方で、「転向」した人物像も登場させる。その一人、「キリシタン史における日本人知識人の筆頭」である、戦国時代末期から江戸時代初期に生きた不干齋ハビアンについて、「日本人の手になる最初の本格的なキリスト教護教書」である「妙貞問答」、そして転向後に記した「破提字子」を、山本七平の「日本教徒」や村松剛の「死の日本文学史」から引用しつつ論述し、日本人の精神状況の一面をのぞかせる。

また、最終部分の数回では、新井白石の「西洋紀聞」、平田篤胤の「本教外篇」を述べ、関心を呼ぶ。とくに「ネガのキリシタン史」として平田篤胤について2回にわたって記述、「マテオ・リッチら中国のキリスト教宣教師の教えが平田篤胤を通して日本思想の中核に入り込んでいく」というくだりは、興味深い。

日本人の心に植え付けられたキリスト教思想を展望できるものとして、「ザビエル来日四五〇年記念企画取材チーム」によるこのシリーズを評価したい。

○キリスト新聞ではこのほか、1999年1月1日付第1面で、ザビエル特集として「新しい天と新しい地を見た」と記して「上陸記念碑」の写真を掲げ、また同日付第9面では鹿児島市内の「キリスト教マップ」を掲載している。

(3) カトリック新聞「福音渡来 ザビエル渡来四五〇

周年記念企画」

同じキリスト教の中で、カトリックの機関誌「カトリック新聞」では、1999年5月30日付から、不定期ながら「福音渡来—ザビエル渡来四五〇周年記念企画」を掲載した。「この時代は、外来の宗教の渡来という面だけでなく、西洋と東洋の異なる文化同士がダイナミックにぶつかり合う時でもあった。文化の衝突によって何が消滅し、何が今日残ったのか。幾つかの側面を取り上げ、ザビエルの生きた時代を、その足跡を自教区に持つ司教たちの、ザビエルへの思いも紹介しながら、シリーズで検証する」(初回の前書き)というねらいである。

各回の内容は次の通り(各回とも約2000字)。

- ①「ザビエルと音楽」竹井成美・宮崎大学教育文化学部教授(5月30日)
- ②「ザビエルの宣教構想—言語習得・文化の把握・長期展望」島本要・長崎教区大司教(6月27日)
- ③「ザビエルの宣教構想—他宗教との対話のため」島本要大司教(7月4日)
- ④「ザビエルの宣教の根本メッセージ」結城了悟・日本二十六聖人記念館館長(7月25日)
- ⑤「ザビエルと宣教魂」大塚喜直・京都教区司教(10月3日)
- ⑥「宣教と教育」尾原悟・前キリシタン文庫所長・上智大学文学部教授(10月31日)
- ⑦「ザビエル渡来に想う」松永久次郎・福岡教区司教(11月7日)
- ⑧「ザビエルと祈り」片岡瑠美子・長崎純心大学人文学部教授(11月14日)
- ⑨「ザビエルの生涯に学ぶ」三末篤実・広島教区司教(11月21日)
- ⑩「福音宣教の内的困難」平山高明・大分教区司教(12月5日)

とくに③において島本大司教はこう述べている。「ザビエルは非キリスト教諸宗教の神を悪魔とし、宗教論争を通して彼らを論駁するために日本の宗教を正確に把握しようと努めた。過去において諸宗教に対する教会の姿勢は確かにこのように対決的であった。互いの相違点を強調し過ぎたからである。第二バチカン公会議後の今の教会は、互いの相違点ではなく共通点を重視するように、護教的宗教論争ではなく、対話を通して真の神との出会いを探るよう呼び掛けている。そのためにこそ他宗教を正確に把握するというザビエルの宣教構想が今も生かされなければならないのである」

またカトリック新聞では、当然のこととはいえ、かなりのスペースをさいて、以下のように特集を再三組んでいる。

○ザビエル渡来450年特別企画、99年4月4日付第2面、第3面=「今や、恵みの時、今こそ救いの日」と題して、日本におけるザビエルの足跡、ザビエルに学ぶこと、ザビエルの年譜、記念関連行事などを収録。

○上陸記念特集、99年8月15日付第2面、第3面=「対話から尊重へ—他宗教からの学び」と題して、「五十嵐卓三・曹洞宗乘慶院住職に聞く」という内容。五十嵐氏は山形県鶴岡市在住で、ザビエルの研究者と言われる。

○「福音を日本にもたらしたザビエル再発見」、99年11月21日付(全面広告)=書籍、ビデオ、CDを特集。

(4) 朝日新聞の連載「ザビエルの時代（キリシタンの時代）—宗教論争を読む」

朝日新聞（東京版）では、99年6月22日付から夕刊「こころ」のページ（毎週1回）で「ザビエルの時代—宗教論争を読む」を連載している。（同8月31日付から表題は「キリシタンの時代」になった）

この連載は、2000年3月いっぱいづづけられたが、終始一貫して「仏教とキリスト教の対話・論争」に視点を当てており、その意味で、他の企画紙面では見られぬほど、中身が濃い。

たとえば「神」という言葉の翻訳が当初は「大日」であったということ。家が真言宗であったのではないかと思われるアンジロウが「大日」と訳し、日本側の仏教僧侶からは「インドから来た新しい仏教の一派」とさえ思われ、歓迎されたが、ザビエルは次第にその訳の誤りに気づいて原語の「デウス」をそのまま使うようになった経緯。

また、霊魂は不滅かどうかという論争も長い間にわたって、ひんぱんに、多くの宣教師と仏教僧侶との間で、あるいは日本人市民との間で論議されていること、さらに宣教師たちは、悪魔はなぜ存在するのか、全能の神はなぜ悪を生み出す人間をつくったのかという質問攻めにあったことなど、論争の焦点を示す。この連載担当記者は多くの関係書籍を駆使しており、その著者たちの見解を求めて論評を加えている点で、視野の広いシリーズとなっている。

○朝日新聞には99年4月23日付夕刊文化欄で柴田篤・九州大学教授の「ザビエル渡来とその意味——日本に世界の窓開く」を書いている。「世界の中の日本」はザビエルから始まるとし、「西洋文化との出会いを考える」展覧会は、単なる回顧ではなく、キリスト教・西洋文化と日本人とのかかわりとその意味について見つめ直す絶好の機会」と結ぶ。

○また同紙99年12月7日付夕刊の「にゅうす・らうんじ」欄で、ザビエルの「聖腕来日」（注）を1ページ使って取り上げ、「時を超えて人間のありようを問うたザビエル」を描いている。

○朝日新聞99年11月22日付朝刊では「マカオ 中国返還まであと1カ月—消えるアジア最後の植民地」という特集面を組んで、大航海時代からつづく歴史の水脈を述べ、「マカオ」の地名ミニ解説では、ザビエルのことを記している。またこの紙面では、かつてポルトガルが統治した「東ティモール」からの難民にも触れており、歴史の大きい流れをわからせる。

（注）§1（3）に記載

(5) 英字紙、海外紙の紙面から

「日本発」で英字紙や海外の新聞にも掲載されている。筆者が目にしたものは以下の通り。（注1）

①THE JAPAN TIMES 1998年9月30日付＝「ザビエル

上陸450年を記念する鹿児島の記事として、紙面の3分の1ほどのスペースをさいている。ザビエルが鹿児島に上陸して日本宣教する状況や、地元における記念行事の動きなどを記す。

②L' OSSERVATORE ROMANO 99年9月22日付＝「ザビエル日本上陸450年、信仰と文化の豊かな出会い」

ローマ・カトリックの機関紙英語版（週刊）に1ページの半分以上を使って掲載。白柳誠一枢機卿の筆になるもので、ザビエルがヨーロッパとアジアの文化交流をもたらした意義を述べ、上智大学で行われる国際シンポジウム（注2）が重要な討論の場となることを記している。「このシンポジウムが、単に日本のカトリック教会だけでなくザビエルを愛する人々みなにとって、21世紀に向けての新しい理解を与えることを望む」と結ぶ。

（注1）カトリック中央協議会の資料による

（注2）§1（5）参照

(6) 雑誌から

一般雑誌でも、「ザビエル」を企画したものが多い。その中から、目にとまったものを紹介する。

①「サライ」（月2回）1999年11月4日号特集＝「ザビエルの美味しい『置き土産』」（p139—p156）

表題に「美味しい」とある通り、これは食べ物を中心に見た「置き土産」特集である。「キリスト教布教という彼の目的は歴史に押しつぶされたが、中世の日本にもたらされたルネサンス・ヨーロッパの数々の文化は、たとえば、美味というかたちでも残された」と前文に記す。「聖フランシスコ・ザビエル像」（神戸市立博物館蔵）を冒頭に掲げ、南蛮文化を持ち込んだザビエル、ヴァリニャーノ、フロイスらキリスト教宣教師を紹介するとともに、日欧交易時代にもたらされた音楽、地球儀などの文物を紹介している。

つづいて食べ物として、てんぷら（長崎市）、鶏卵そうめん（福岡市）、黄飯・かやく（大分市）、イカの墨あえ（長崎・生月など）、カステラ（長崎市）、カスドース（長崎・平戸）、金平糖（福岡・久留米）、丸ぼうろ（大分・中津市）、「せんだご汁」（熊本・天草）などを、店舗とともに紹介していて、なるほどと思わせる。「こんぺいとう」がポルトガル、スペインの砂糖菓子「コンフェイトス」から来ているというのも面白い。よく言われているように、「てんぷら」がポルトガル語の「テンペロール」（調理の意）とも、スペイン、イタリア語の「テンポラ」（暦の意）、また「かすてら」がスペインの「カスティージャ地方のケーキ」から来ていることなど、今に遺る言葉や文物を示す。

②「芸術新潮」99年2月号特集＝「ザビエルさん、こんにちは」（p1—p71）

全誌140ページのほぼ半分を使った特集で、力が入っている。「大ザビエル展」などで紹介されてきた「聖フ

ランシスコ・ザビエル」(エンリケス作)を表紙にし、高祖敏明・上智大学教授のガイドでザビエルの生涯を、豊富な写真と絵画で展開していて、理解しやすい。また第2部では、「興味津々『南蛮』ワールド」として、坂本満・聖徳大学教授のガイドで、古地図、絵画、屏風絵、南蛮漆器などの「遺宝」を通して“エキゾチックな美”をあふれさせている。

とくに、「白人女性も日本に来たのでしょうか」「絵師たちは実際に南蛮人を見て描いたのですか」「南蛮屏風はどんな人が描かせたのですか」「洋服の仕立屋さんが日本にいたのですか」など、Q Aの形で記事、画像を構成していて、親しめる。芸術雑誌だけに、さすがに紙面の印刷は美しい。

§ 3 『ザビエル全書簡』にみる 「宗教論争」から

「ザビエル来日450周年記念」の諸行事、諸報道を通して、ザビエルがもたらしたヨーロッパ文化の衝撃、東西文化接触の意義については、十分に知ることができると思う。ただ、肝心の「文化衝突」については、あまり深くは述べられていないように思われる。上記してきたような、「キリスト新聞」の連載企画「日本キリスト教史の旅」と、朝日新聞「こころ」のページ連載の「ザビエルの時代(キリシタンの時代)」だけが論争の核心に触れていて、「450年の意義」をわからせてくれる。

そこで、ザビエルがどのように当時の日本の仏教を見たか、また、どのように僧侶たちと論争したか、「聖フランシスコ・ザビエル全書簡」=河野純徳訳、平凡社、1985年(以下、「全書簡」)から、いくつかを引用してみたい。

「全書簡」は748ページに及んでおり、当時からすでにヨーロッパ諸国の「宣教」「外交」に携わる者が、いかに書簡によって本国、本部へ事情を説明し、徹底させているか、十分に知ることができる。それらの書簡によってわれわれ日本人は、16世紀中葉当時の日本の事情(生活や意識)や文化接触の状況を理解できるのである。中でも第4章「日本の宣教(1549-52)」=書簡第82から100まで」が、圧巻だと言える。(注)

① [ボンズ(僧侶)たちの罪] 世俗の人たちのあいだでは、罪を犯す者は少なく、彼らがボンズと呼んでいる僧侶たちよりも、道理にかなった生活をしています。ボンズたちは自然に反する罪を犯す傾きがあり、またそれを自ら認め、否定しません。……ボンズ以外の人びとは、ボンズたちの思まわしい罪を(私たちが)非難するのを、喜んで聞きます。彼らは、そのような罪を犯す者がどれほどの悪人であるか、また、そのような罪を犯すことで神をどれほど侮辱しているかを主張する私たちに正しい理由があると考えています。(第90-16)

② [僧侶の説教] ……彼らがする説教のすべにおいて大

切な点は、人びとが過去にさまざまな罪を犯したり、また現在罪を犯していても、ボンズが人びとのために祈祷すれば、たとえ地獄へ行っても、自分が選んだ宗派の聖人が救い出してくれることを疑ってはならないということで、そのためにボンズは五戒を護っているのだということです。……またさらに、貧者はボンズに布施をしないので、地獄から救われる手段はないのだと説教します。(第96-12)

③ [ボンズとの対話] ……それで私たちは毎日、彼らの教義や論証について質問しましたが、ボンズも僧侶も祈祷師も、神の教えをよく分かっていない人たちも、(私たちの質問に)答える術がありませんでした。信者たちは、ボンズが答えられないのを見て、たいへん喜び、…討論の場に居合わせた異教徒たちも、今まで信じていた宗派が過ちであることを認め、その信仰を失うにいたしました。(第96-17)

④ [創造についての僧侶の反論] ……もしも神が善であるとすれば、(神は)人間をこんなに弱く、また罪に陥りやすく創造しないで、少しも悪がないく状態に創造したに違いないと言いました。そして神は、これほどひどい地獄を造り、〈私たちのいうところに従えば〉地獄に行く者は永遠にそこにいなければならないのだから、慈悲の心を持つ者ではなく、したがって万物の起源である〈神を〉善であると認めることはできないと言いました。また、もし神が善であるとすれば、これほど遵守しがたい十戒を命じなかったであろうと言いました。(第96-20)

⑤ [日本人たちは知識を切望し、質問は限りがない] ……(日本人たちは)好奇心が強く、知識欲が旺盛で、質問は限りがありません。……彼らは地球が円いことを知りませんでしたし、太陽の軌道についても知りませんでした。彼らはその他、たとえば流星、稲妻、降雨や雪、そのほかこれに類したことについて質問しました。私たちが答え、よく説明しましたところ、大変満足して喜び、私たちが学識のある者だと思ったようです。(第96-21)

⑥ [地獄に行った者は救われない] ……ボンズは〈地獄から救われることを〉説教しなければ、食べることも着ることもできません。時がたつにつれ布施が減りはじめ、生活に困ってきて、名誉を失いました。この地獄についての〈論争〉でボンズたちと私たちとはまったく不仲になりました。(還俗した僧侶たちの話から)寺院内の邪悪な生活が明るみに出て、山口のボンズとボンザ(尼僧)は人びとの信頼を失いました。キリスト信者たちは、山口にある寺院の百くらいが、布施が減って遠からず荒廃してしまうだろうと言いました。(第96-26)

⑦ [私たちへの悪口] 〈日本人は〉来世において食べ、飲み、着物を着、履き物を履くくと思ひこみ、そこでも、金持ちのほうが釈迦や阿弥陀やその他の者からいっそう尊敬され、大切にされるという考えを抱えています。これらすべての誤った考えは、ボンズが説教で教え

こむのです。ボンズの説教に大勢の人たちが集まって、そこで私たちの主なる神についてひどい悪口を言います。……〈彼らによれば〉日本で（キリスト教の）神を拝むようになれば、日本は滅びてしまうだろうとのこと。さらに彼らが説教する時に、勝手に神の名を解釈して、神（デウス）はダイウソと同じであると言い、ダイウソは日本語で大きな嘘を意味しているから、私たちの神について注意しなければならないと言うのです。（第96-33）

⑧ [地獄へ落ちた者に救いはない] ……彼ら（日本の信者たち）は、神はなぜ地獄にいる人を救うことができないのか、そしてなぜ地獄にいつまでもいなければならないのかと、私に尋ねます。私はこれらすべての〈質問に〉十分に答えます。彼らは自分たちの祖先が救われないことが分ると、泣くのをやめません。私もまた〈地獄へ落ちた人に〉救いがなくて涙を流している親愛な友人を見ると、悲しみの情をそそられます。（第96-49）

⑨ [宣教師は大きい迫害にあう]（日本に行く神父たちは）考えも及ばないほど大きな迫害を受けなければなりません。……〈日本人の〉質問に答えるために、学識のある〈神父〉が必要です。とくに哲学がよくでき、弁証法に優れた人で、〈僧侶との討論で〉明らかになる矛盾をすぐにとらえることができる人が必要です。ボンズは矛盾を指摘され、答えに窮すると、いたく恥じ入ります。（第97-8～10）

こうした記述を読むと、「ザビエル後」における迫害、弾圧、禁教への萌芽が感じ取れるように思う。

そうした宣教の後に日本を去ったザビエルは、こう書いている。

「私は肉体的にはたいへん元気で日本から帰って来ましたが、精根は尽き果ててしまいました。……私の頭はすでに白髪におおわれてしまいましたが、体力に関する限り、これまでに経験しなかったほどの充実感に〈満たされています〉」（第96-53=1552年1月29日、コーチンよりヨーロッパのイエズス会員あて）

（注）引用文中、〈 〉内は訳書のもの、（ ）内は筆者（外村）の注書き

結 び

本稿において、ザビエル渡来450周年を記念する諸行事と諸報道を通して、その今日的意義について考えてみた。それらの諸行事、諸報道が、日本にとって初めての文化接触の重大な意義を、日本国内の一キリスト教の世界にとどまらず、広く一般に知らしめた意味は、大きいと思う。ただ、文化衝突の激しさや、それによる迫害、禁教の歴史的意味がどれだけ伝わったかについては、いささか悲観的になる。報道にそれを望むのは無理なことかもしれないけれども。

筆者（外村）は、福岡女学院大学人間関係学部1年生

の1999年度基礎演習において、450周年を記念して「ザビエル」をテーマにした。学生たちに関連の書物を読ませ、担当する分野の「ザビエル書簡」を読ませて、発表させた。いわゆるゼミとしてはまだまだ未熟のものであったが、学生たちは「もしこのゼミに加わらなかったら、ザビエルのことは高校教科書以上のことは知らないままだったろう」と、異口同音に語っていた。

今回の紀要に「ザビエル」を取り上げたのも、「450周年記念」にほかならない。ただ、たとえば「諸行事」「諸報道」について、筆者の目にとまったものだけにかぎっているため、多くの関係都市でさまざまな行事があったであろうにもかかわらず、それらについて触れることなく終わってしまい、欠落が多いはずであることを、おわびしておきたい。